仮面ライダーサイト

シェイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーサイト

【Ｎコード】
Ｎ５３３８Ｊ

【作者名】
シェイク

【あらすじ】
これはオリジナルのライダーが主役です

第1話　変身（前書き）

これはオリジナルのライダー『サイト』が主役です。そういうのが嫌いな人は見ないことをオススメします

第1話　変身

深夜の路地裏

1人の若者が座り込んでいた、その顔は恐怖で歪んでいる。先程まで一緒にいたはずの仲間は彼の周りで死体となっていた。そして彼は今仲間の後を追うことになる。目の前の異形によって

「バ、バケモノ…」

そう言った瞬間異形は鎌のような腕でその命を奪うのだった。

如月電気店と書かれた店の奥で従業員だろう青年がカウンターに突っ伏し熟睡していた

「うーん…アヅイヨ〜…踊れ踊れ」

果たして何の夢を見ているのだろうか？すると店の奥からお玉を持った若い女性が出てきた。そして…

「起きろー！」

スコーン

「ぎゃあ！」

青年の頭をお玉で叩きムリヤリ覚醒させるのだった

「いてーな美希、何すんだよ」

安眠？を邪魔された青年はいかにも不機嫌そうな表情で抗議した

「何よ！昼ご飯だから起こしたんじゃない！そんな事言うなら食べるな！」

美希と呼ばれた女性がそう言いながら青年の茶碗を取り上げ

「大体翔は寝過ぎなのよ！」

と言った。茶碗を取り上げられた青年…日向翔【ひなたかける】はそれを見上げ

「茶碗返せ…」

とだけ言うのだった

その後美希から説教を喰らっていた翔は美希の父であり如月電気店店主の如月亮介によって助けられた

美希

「そう言えば昨日変な事件あったよね？」

夕方になり夕飯の買い物の帰り道で美希は荷物持ちとして連れてき

た翔に聞いた

翔

「変な事件？」

翔は予想以上の荷物に悪戦苦闘しながらその質問を聞き返した

美希

「うん、近くの繁華街で起こったんだけどさ何かに切り裂かれたんだって」

翔

「怖！なんだそれ侍か？」

美希

「な訳ないでしょ」

そんな事を言いながら歩いていると誰かが道端に倒れておりその近くにはその人の物であろうアタッシュケースがあった

翔

「おい、あんた大丈夫か？」

見たところ３０歳くらいだろうその人を起こしてみると何かに切り裂かれたような傷があった

翔

「ん、この傷は？」

さっきの話の事件の傷に似ている

美希
「翔！」
美希呼んだので振り向くと何やら顔が青ざめ震える指で前方を指していた

翔
「なんだ？」
翔もそっちを見る、そこには鎌のような腕をしたバケモノがいた
バケモノは俺と美希を見るとゆっくりと近づいてくる。あまりの恐怖に足が竦んで動けなくなる

美希
「あ…あぁ…」
バケモノは美希に近づくそれに気づき落ちていたパイプを拾い上げバケモノを叩く

翔
「美希逃げ…」
最後まで言い切れぬ内にバケモノによって弾き飛ばされてしまう

翔
「ぐあ」

美希

「翔！？」

美希の声が聞こえた瞬間背中に衝撃が走る。

翔

「ぐあぉ」

あまりの痛みに呻き声を上げる。どうにか身を起こすとバケモノが美希に向かって近づく後ろ姿が見えた

美希

「あ…あ…か、翔」

翔

「美希～！」

なんとか美希の元へ行こうとするが体が動かない。もう駄目かそう考えた瞬間

「諦めるな…」

声とともに肩を掴まれる。振り向くとそこには倒れていたはずの人がいた

翔

「あんた生きていたのか。」

俺の問いに答えずもう一度同じ事を言う

「あの娘を助けたいなら諦めるな…」

諦めるなって言ったって

翔

「どうしたらいいんだ…」

呟くように俺は言った。相手が人間であればどうにか出来る。でもバケモノじゃ…

翔

「何も出来ないじゃないか…」

今にもバケモノの餌食になりそうな美希を助けることは俺には出来ない

「君、名前は…」

名前？こんな時に…

翔

「日向翔だ」

「そうか」

そいつはそう言った後アタッシュケースから何かを取り出した

翔

「あんた、何を？」

「ライダープログラムの装着者を金谷啓二から日向翔に…」

その瞬間手に持っていた機械から電子音声が聞こえる

『ニンショウシマシタ』

そしてそいつは俺に持っていたディスプレイ付きの手のひらサイズの機械とアタッシュケースから取り出したバックルが無いベルトを渡してきた

翔

「これは？」

「時間が無いから使い方だけ説明するハードに付いてるコネクトスイッチを押し込みベルトに装着するんだ…」

戸惑う俺をよそにそんな説明をする。説明の最後に

「これを使えばあれを倒して彼女を救うことができる…」

俺は弾かれたようにそいつを見上げた

翔

「本当か！」

そいつは頷いた後

「後は君次第だ…」

と言った。

美希
「キャアアアアア」
翔
「美希っ！」
美希の悲鳴が聞こえ振り向くと今まさに美希に向かって鎌が振り下ろされる所だった
「行け！」
あいつがそう言う前に俺は駆け出していた
翔
「待て！」
バケモノは俺の声が聞こえたのかゆっくりと振り向いた
美希
「翔…逃げて！」
俺はそんな美希の言葉を無視してベルトを着け機械を前に突き出し言われたとおりに機械の上にあるスイッチを押す。すると機械から電子音が響く
『ＣＯＮＮＥＣＴ』
翔
「変身！」
そう叫びベルトに機械を装着する

『ＯＮ！』

するとディスプレイから０と１の羅列が幾条も出現し俺を包む。それが弾けた時そこにいたのは翔ではなく青を基調とするスマートな鎧のような物で全身を覆い尽くす戦士がいた。戦士のつけているバックルのディスプレイには

ＳＡＩＴＯ

の文字が出現していた

第1話　変身（後書き）

仮面ライダーサイトを呼んで下さいましてありがとうございます。

次回はいきなりバトルです。

感想待ってます

第2話　決着（前書き）

こんにちはシェイクです。

いきなりバトルは無理があったか

第2話　決着

青い戦士…サイトは鎌を持った異形に殴りかかる

サイト
「ハアッ！」

気合いとともに何発か叩き込むと異形はたまらず体勢を崩した

サイト
「せや！」

体勢が崩れたところに間髪を入れずミドルキックをかます
「グギャァァァ」

キックの威力で異形が後退し美希との間が開く

サイト
「大丈夫か美希？」

サイトが声を掛けると美希は驚いたようにこっちを見た
美希
「か、翔なの？」

美希が上擦った声で聞いてきた。一瞬意味が分からなかったが自分の姿を思い出すと合点がいった

サイト
「おう、俺だ！大丈夫そうだな。」

まず、サイトが自分である事を伝え、美希が無事か確認する

美希
「大丈夫だけど…」

何やら聞きたそうだがそんな事してる場合じゃない

サイト
「そうか！じゃああの人を連れて安全な場所まで行け！」

美希
「え、ちょ…」

サイト
「文句なら後で聞いてやる」

少々強引だがこうでもしなけりゃ美希は納得しないだろう。そうこうしている内に異形はコッチに近づいてくる

サイト
「分かったら行け！」

俺は目の前の異形から美希を守るために殴りかかる

「ガァァァァ」

さっきは通じた攻撃、だが今回は左の鎌でガードされる

サイト
「しまった！」

そう思った瞬間火花が走るどうやら空いている方の鎌で攻撃したらしい

サイト
「ぐあっ」

たまらずよろけてしまい連続で攻撃を喰らう

「ギシャァァァ！」

サイト
「ぐわあああ！」

美希
「翔！」

安全な場所までたどり着いた美希が翔の声に反応する

サイト
「いてーなクソッタレ。そんな危ないモン振り回すんじゃねーよ」

振り向くとサイトは異形の鎌による連続攻撃に翻弄され、攻撃をかわすのみになっていた

「君」

美希はその言葉に振り返ると先程運んで来た人が苦しそう話しかけてきた

美希
「どこか痛むんですか？」
美希はその声を聞き体の様子を聞いた。しかし帰ってきた答えは思いも寄らぬ物だった
「彼に伝えて欲しいことがある」
一方その頃サイトは攻撃範囲の違いでろくに攻撃できずにジワジワと追い詰められていた
サイト
「チクショウ！」
一旦後方に飛び退き異形との距離を開く
美希
「翔！」
サイト
「なんだ！」
美希に呼ばれ振り向くと美希はサイトのベルトの腰の辺りを指差し
美希
「あなたの腰に付いてるケースに武器が入ってるんだって！」
サイト
「何？」

そう思い腰を見てみると何やらディスクケースみたいなのがついていた

サイト
「こいつか？」

果たしてこんな小さい物に武器なんて入っているのだろうか…。一抹の不安を振り払いながらも開けて中の物を取り出す。そこには『ＧＵＮ　ｄｉｓｃ』と書かれたディスクが入っていた

サイト
「これが…？」

果たしてディスクが武器になるのだろうか、もしかしたら空に向かって放ったら　赤いタカになるかもしれない

美希
「違うわよ！それをバックルに入れるの」

ディスクをバックルに入れる…そう思いバックルをしげしげとみる

サイト
「ここか！」

ほとんど勘でその場所を見つけるとそこにディスクを入れる

『ｇｕｎｄｉｓｃ　ｌｏａｄｉｎｇ
』

すると再び電子音と数字の羅列が飛び出し目の前に集まる。それが弾けた時そこには銃があった

サイト
「すげー…」

思わず見惚れてしまった。ともかく念願の武器が手に入った

サイト
「よくもいままで好き勝手してくれたなぁ！」

その銃を手に取りゆっくりと相手に向ける

サイト
「お返しだ！」

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

立て続けに連射し異形へダメージを与える

「グゴォォォォ…」

さしもの異形もこれは効いたのかその場に崩れ落ちる

サイト
「お次はコイツだ！」

サイトは再びケースからディスクを取り出す

『ｓｏｗｄｄｉｓｃ　ｌｏａｄｉｎｇ』

また電子音が響き羅列が銃を包む。それが弾けた時銃は剣になっていた

サイト
「セイ！」

サイトは走り込み異形へと剣を振るう

「ギシャァァァ」

異形はその一撃でよろめきタタラを踏み後退する

サイト
「はっ、せや、トリャア！」

それを許さず更に踏み込み連続で斬撃を浴びせる。

「グギャァァァア」

最後の一撃で異形は自慢の鎌を砕かれる。サイトはそれによって出来た隙から異形を蹴り飛ばしケースから『ｓｐｅｃｉａｌ　ｄｉｓｃ』と書かれたディスクを取り出す

サイト
「覚悟はいいか」

『ｓｐｅｃｉａｌｄｉｓｃ　ｌｏａｄｉｎｇ』

その音声が響いた瞬間サイトは高く飛び上がる、周囲からは幾条も

の羅列が出現し異形を貫きその動きを封じ込める

サイト

「でやあああ！」

数字で出来た道を通り抜けサイトは異形へと蹴りを炸裂させ　た

「グォォォォ」

その瞬間周りの羅列が異形の中へと入っていき

「グガァァァァ！」

異形は爆発を起こし消え去った

第2話　決着（後書き）

感想まってます

第3話　プログラム（前書き）

久々の更新。かなり手こずったのでビミョーです

第3話　プログラム

翔
「んで、あれはなんなんですか。」

異形との戦いを終えた俺達は倒れていた男性…金谷啓二を連れて病院に来ていた。
そしてさっきの事について質問してるところだ
金谷
「そうだな…」

金谷さんはそう呟き思案するように目を瞑る

美希
「どうしたんですか？」

金谷
「ん？なにどう説明しようかと思ってね」

そうして考えがまとまったらしく口を開いた

金谷
「話は今から15年程前まで遡る、当時日本では家庭にパソコンやネットワークが普及し今のネット文明の基礎を作った」

翔
「いきなり何を？」

金谷
「まあ最後まで聞いてくれ。それと同時期にとある研究が行われた」

美希
「研究？」

金谷
「その研究とは究極の人工知能と無限の容量を持つコンピューター
そしてそのコンピューターで作り出したプログラムを現実にすること
とのできるソフトウェアの開発だ」

…何を言っているの
だろうかそんな事出来るわけが無いだろ

金谷
「勿論それは夢物語で終わった…」

翔
「なんだ、何かあるんですか？」

終わったのなら口ごもることはないだろう

金谷
「しかし今から8年前状況が変わった」

そこで一旦言葉を区切り

金谷
「先程話した研究の一部が成功した」

翔
「一部？」

金谷
「プログラムを現実にすることが出来るソフトウェア…『リアル』が完成したんだ」

『リアル』…その言葉を反芻させる

美希
「それに何か問題があるんですか？」

美希の言う通りだ、話だけ聞く限りでは技術の進歩と言うだけで問題が有るとは思えない

金谷
「リアルには何の問題も無い、問題があるのはプログラマーのほうだ」

プログラマー…そうだよなプログラムである限り設定でどうにでもなる。

翔
「そのプログラマーはリアルを使って何をしようとしているんだ？」

金谷
「奴らはリアルを使って、とあるゲームをしている。」
ゲーム？

金谷

「自分たちが作り出したプログラム…先程の異形をリアルで現実化させ人を殺し、その人数をスコアにして誰が優れたプログラマーかを決めるゲームだ…」

なんだと…聞いている内に怒りが込み上げてきた。元来、正義感なんてないのだが知ってしまったら無視は出来ない。

翔
「どうすればいい？」

金谷
「なに？」

金谷さんが聞き返してくる。美希も何か言いたそうだ

翔
「どうすればそのふざけたゲームを止められる？」

金谷
「出てくるプログラムを全て倒すことが出来れば止められるが？まさか…」

金谷さんは気付いたらしい

翔
「そんなもの俺が止めてやる」

美希
「なに言ってるのよ翔、正気なの？」

美希が驚いている。当たり前だ俺だって痛いのはごめんだ、だけどな

翔
「俺は知ってしまったからな…。」

もう戻れない

金谷
「いいのか？」

念を押すように聞いている

翔
「ああ」

美希
「でも…」

美希が何か言おうとしているが、それを遮りサムズアップをして

翔
「大丈夫。何たって俺の悪運は世界一だからな」

と、飛びっきりの笑顔で答える

美希
「翔」

その笑顔で美希の心も決まった

金谷
「若いっていいな…」
金谷さんは何故か暗くなっていた

先程サイトが異形を倒した場所に1人の人間が立っていた
???
「おかしいな…。反応はここなのにプログラムがいない？」
その誰かはそう言いながら周囲を警戒するように見渡す
???
「やっぱりいない…」
見たところ中学生位だろうかパーカーを羽織りハーフパンツを履き
顔は深めに被った帽子で見えない。とその時その携帯電話が鳴った
???
「もしもし」
「どうやら先を越されたらしい」
電話をしている人物が眉をひそめるのが分かった
???
「うん、分かった。で、どうすればいい」

「今日の所は帰ってきてくれ後はそれからだ」

???

「了解」

そう返し携帯電話を閉じ、つまらなそうに帽子をとる。現れた髪は襟元まで伸びており、整った顔立ちをしていた

???

「つまんないな…。誰だか知らないけれど私の楽しみの邪魔をしたんだ覚悟しておいたほうがいいよ」

誰にともなく呟くと

少女はバッグの中から機械と一枚のディスクを取り出しディスクを入れる

『ＳＵＢｄｉｓｃ　ｅｓｃａｐｅｌｏａｄｉｎｇ』

少女が数字に包まれ、それが弾けた時そこにはだれもいなかった

第４話　日常（前書き）

更新サボっててすみませんでした！

これからは頑張っていきます

第４話　日常

翔がプログラムを倒してから３日が過ぎた。その後、プログラムは現れず翔と美希はごく普通の生活をしていた。

ジュージュー

ご飯時の如月家の台所で美希が忙しそうに昼ご飯を作っている。

美希
「ふう～、出来た」

そう言って中華鍋から作っていたチャーハンを皿に盛り付け、中央に旗を建てた

美希
「お父さん、翔ご飯出来たよ」

翔・亮介
「「おう」」

翔・亮介・美希
「「「いただきます。」」」

亮介

「いや～上手いなぁ、美希腕を上げたな。」

美希

「何言ってんの。これ位出来て当然よ。ね、翔？」

翔

「…」

返事がない

美希

「翔？」

美希が不審に思い翔を見るとそこには、チャーハンについていた旗を崩さないように食べている翔が居た

美希

「アンタ何やってんの…？」

それに反応してこっちを見た翔は

翔

「見りゃ分かるだろチャーハンファイトの練しゅ…」

スコーン

翔が言い終わる前に美希はいつの間にか持っていたお玉で翔の頭を叩いていた

翔
「悪かったよ食べ物で遊んでよ…」
あれから口論になり完膚なきまでに叩きのめされた翔は美希に土下座で謝っている。
美希
「分かればいいのよ」
それを見て満足げに頷く美希2人の関係は何時もこうなのだ。
亮介
「なんだかんだ言って仲がいんだよね。」
亮介がズズッとコーヒーを飲みながら呟いた
翔
「チクショー面白くねえ」
土下座させられたことをまだ根に持つ翔は店のカウンターに突っ伏していた。
翔
「なんか面白いことねえかな」
するとその時翔の携帯がなった

♪時間の波を捕まえて今すぐに…♪

翔

「おっ！メールだ」

美希・亮介

「「…」」

どう突っ込むべきか迷ってる美希と亮介を無視しやってきたメールに目を通す翔

翔

「…美希、今から星川と遊びに行ってくるから。」

そう言うやいなや自分の部屋に飛び込み着替える。３０秒ほどで出てきた

翔

「じゃ行ってきまーす。」

ドルゥーンとバイクで遊びに向かった

美希

「…店番は？」

美希の呟きはエンジン音にかき消されたのだった

翔

「待ち合わせは此処だったな」

翔はバイクから降りて周りを見る

「おーい」

遠くから声が聞こえたのでそっちを見るとそいつは居た

翔

「久しぶりだな星川」

星川勇太…翔、美希の幼なじみ翔より身長が高く１８０程ある

星川

「そうだな。じゃあ早速ゲーセン行こうぜ」

ちなみに重度のゲーマーである

翔

「分かった分かった」

翔ｓｉｄｅ

～ゲームセンター・虎の舞～

翔

「何時来てもゲーセンとは思えない名前だよな…」

そんな感想を持ちながら入っていく

翔
「目当ては新しく入った格ゲーだったな」
確かファイナルストリート４ダッシュだったか？
星川
「おうよ、だがその前にこっちのゲーセンに来たらこっちを１プレーするんだ」
…ストイックなやつだ。見てると何やら１００円玉を左手に何回かこすりつけてる
翔
「何やってんだ」
星川
「昔からの癖でなこうするとリラックスして集中出来るんだ」
…ストイックなやつだ。それから俺もお気に入りのレースゲームをやったりしていた
星川
「翔、んじゃ今から新作やって来るぜ」
星川が気合いの入った声で告げてきた
翔
「俺も見に行くよ」
俺も気になるのでついて行ってみる、流石は新作人だかりが出来て

いる

ザワッ

どうやら今回のバトルが終わったらしい

…なんか雰囲気がおかしいな。

「バカなコレで２０人抜きだぞ」

「あり得ねえ」

なんかとてつもない奴がやってるらしいな

翔

「星川やめたほうがいいんじゃ…」

星川

「完全独走ってか、そんじゃ俺が越えてやるよ」

駄目だ聞いちゃいねぇ。そして星川が筐体へ向かう

『Ｒａｕｎｄｏ１　ｆｉｇｈｔ！』

始まった。星川が使ってるのは道着をきて波動な拳を撃てるアイツだ。対する相手は青いチャイナで蹴り技が得意な姉さんだ。

翔

「ていうか相手つよ！」

なんだコイツ半端じゃねぇぞ。星川も頑張ってるがまずダメージが

通らねえ。こりゃ無理だな

『K．O　PERFECT！』

案の定負けたよパーフェクトで。いやあそれにしても強いなどんな奴だ。俺はヒョイと対戦していた奴を見る。第一印象は

翔

「ガキかよ」

そう子供なのだ。見たところ中学生位か深めに帽子を被っていて顔までは分からんが、パーカーを着てハーフパンツを穿いているな

『K．O！』

2ラウンド目も終わったか今回は頑張ったらしいな。

星川

「あり得ねえ！この俺が負けるなんて」

さっきの奴との勝負に負けたのが悔しかったらしく腹いせに太鼓のゲームをやっている

翔

「まあまあ、そんな日もあんだろ、元気出せって」

そう言ってなだめる

星川

「そういえば俺と対戦してた奴見たんだろ？どんなのだった？」

自分を負かした相手が気になるのか星川がそんなことを訊いてきた

翔
「そうだな…。中学生位だったなぁ？」

それを聞いた瞬間星川は落ち込む

星川
「俺は中坊に負けたか…」

翔
「そうだなぁ」

と言って周りを見渡す。まだ居ると思うんだよね。そうしている内にそいつが視界に入った

翔
「おい、星川あいつだ」

星川
「んだと」

俺の言葉に反応し星川はそいつを睨む、
大人気ねーな…ていうか

翔
「睨むなよ」

星川
「次は勝つ！」

何かを決心したらしい。凄まじい闘志を出している友達を見ながら黙って飲みかけだったコーヒーを飲…。

星川
「ゑ？」

ブハァー。なんだコイツ変な声だすから吹き出したじゃねーか

翔
「何だよゑって？字が違うだろ。つかどうし…」

星川
「あ、あれ…」

星川は目を見開きある一点を指差す。

翔
「何だよ…」

その先を見てみるとそこには星川と戦った奴がいた。しかし今は帽子を取り、襟元までである髪と整った顔立ちが露わになって…

翔
「なるほどな、大体分かった」

それで俺は全てを察した

翔
「星川、お前は女子中学生に負けたんだ！」

そしてトドメを刺してやる

星川
「ＮＯｏｏｏｏｏｏ！！！」

星川の断末魔はゲームのＢＧＭにかき消された

その後処理落ちした星川はフラフラと帰って行った

星川と分かれた俺は帰り道を走っていた

翔
「あ～腹へった」

どっかで食うかなとか思っていると

ギャアアアアア

翔
「何だ！？」

咄嗟にバイクを止め声の聞こえた方へ向かう

翔
「コイツは」

そこにいたのは体中から血を流し倒れている男と恐らくは下手人であろう両の腕に鋭い槍のようなものを付けている異形

翔
「プログラムか」

「グォォォォ！」

そう分かった瞬間プログラムが槍みたいなもので襲いかかってきた

翔
「アブね」

何とかそれを避け距離をとる

「グォォォォ…」

1度避けられたからか様子を見ている

翔
「これ以上テメーらの好きにはさせねー」

俺は懐からベルトを取り出し装着する。そしてもう一つのツール、サイトバックルを取り出しそれを右手で持つ。右手を前へ突き出すと同時に左手を腰に添え、コネクトボタンを押す。

『ＣＯＮＮＥＣＴ』

「変身！」

変身と叫ぶと同時に左手もバックルに添え勢いよくベルトに装着する

『ＯＮ！』

瞬間１と０の羅列が幾条も出現し俺を包むそれが弾けたとき俺は俺じゃなく青い鎧を纏う戦士、仮面ライダーサイトへと姿を変えていた

サイト
「ハァッ！」

気合いと共にファイティングポーズをとる

「グォォォォ！」

プログラムはこっちへ突っ込んでくる。

サイト
「うおぉぉぉぉ！」

俺も迎撃すべく走っていくそしてプログラムは武器を俺は拳を突き出す

今サイトの第２戦目の幕が上がる

第5話　闇（前書き）

長い間放置してしまい申し訳ありませんでした。

仕事がやたら忙しくて…。ようやく一段落ついたので投稿しました。

第5話　闇

サイトとプログラムはそれぞれの拳と得物で攻撃をする。しかしリーチの違いからサイトはプログラムの槍の攻撃を喰らってしまう。

サイト
「ぐあ」

あまりダメージは無いものの衝撃の強さに思わず後退してしまう。

「グキャアアア」

それを好機と見たプログラムは距離を詰め連続で攻撃を仕掛けてくる

サイト
「ぐあ、あぐ、うおぉぉぉ！」

その攻撃により吹き飛ばされたサイトは腰のホルダーから1枚のディスクを取り出す。

サイト
「よくも好き勝手してくれたな…」

そう言いながらディスクをバックルに装填する

『ＧＵＮｄｉｓｃ　ｌｏａｄｉｎｇ』

電子音が響いたと思いきやサイトの手に数字の羅列が出現し銃の形を成す。光が弾けたときそこにはサイトと同じ青を基調とした装飾

銃が握られていた。

サイト

「今度はこっちの番だくらえ。」

そう言うやいなや銃の引き金を引く。銃口から弾が飛び出しプログラムに着弾する

「グキャアアア」

突然の反撃に驚いたのかプログラムは１瞬怯む様子を見せる

サイト

「まだだ！」

この機を逃すまいと立て続けに引き金を引きプログラムにダメージを与える。流石に耐えれなくなったのかプログラムはその身を翻し逃げに転ずる

サイト

「逃がすかよ…」

その様子を見たサイトは腰のホルダーから再びディスクを取り出しバックルに装填する

『ｓｐｅｃｉａｌｄｉｓｃ　ｌｏａｄｉｎｇ』

その電子音に合わせてサイトは腰を落とす

サイト

「ハアァァァァ…」

ある程度落とすと弾かれたように飛び上がり空中でキックの態勢に入る。その瞬間サイトの回りから１と０の数字の羅列が幾条も出現しプログラムに突き刺さり動きを止める

「ガ？ガァァァァ！」

プログラムは突然動け無くなったことに恐怖しているのか何とかしようともがいている。しかしその拘束から逃れることはできなかった。

サイト

「その恐怖はさっきお前が殺した人の分だ…」

その様子を見たサイトは最大限の怒りを込めて呟いた、その後サイトは数字で出来た道を滑りながらキックを炸裂させる

サイト

「ヤァァァァァァ！」

「グキャアアア」

そのキックを喰らったプログラムは断末魔の叫びを残し消滅した。

プログラムとの戦いを終えて変身を解いた翔はプログラムに殺された亡骸の側にしゃがみこみ手を合わせていた

少し時間が経ち帰ろうと振り返ると先程までプログラムと戦っていた場所に何者かが佇んでいた

翔
「誰だ？」
こんな奥まった場所には誰も来ないだろうし、警察だとしてもサイレンの音も聞こえ無かったから違うだろう。
翔
「だから、誰だ！」
多少口調が荒くなるが仕方ないだろう
「流石だよ…」
……
翔
「…は？」
何を言ってるのだろ今初めてあったおっさんに流石と言われるいわれない。
「しかし、その力は我々には邪魔でしかない」
話が見えない、一体何のことだ？
「今日の所は君を見に来ただけだから何もしないが次会うときは覚悟することだ」
話が終わる気配を察知し話かけようとするが、突然その男を中心に一陣の風が吹いた

翔
「うわ！」
その風がやんだときそこには誰も居なかった
翔
「…なんだ一体」
何が起きたか未だに分からない。ただ自分の知らない所で何かが蠢いていることは確かだ
翔
「はあ…なんか疲れたな…。帰ろ」
そう誰にともなく呟きバイクに跨りエンジンを始動させる。次の瞬間心地よい重低音のサウンドと振動が伝わってくる。
翔
「さあ…行くか」
スロットルグリップを引き絞りその場に排気ガスを残しながらバイクは路地に消えていった…
その後帰って来た翔を待っていたのは鬼の形相をしながらお玉を振りかぶっている美希であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5338j/

仮面ライダーサイト

2010年10月9日03時54分発行